潮

第69号

2022年度発行

学校長の言葉

多様性の教育と共生社会

学校長　藤本　光一郎

多様性という言葉は、竹早中学校の教育全体を貫く大きなキーワードです。一人ひとりの個性や違いを理解し、認め合うことに加え、さらに、それを集団としての強みに変えていくことを視野にいれています。そのような考えに基づいて行われた本校の取り組みを先生方がまとめ、今年三月に、『『竹早』×『多様性』でえがく未来―多様性を理解する、活かす教育実践』という書籍が東洋館出版社より出版されました。メディアセンターにも置いてありますので興味ある方はご覧ください。

さて、十月下旬に、本校らしい取り組みが三年生の授業の一環として行われ、私も見学させていただきました。岡部宏生さんという筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳと略し、全身の筋力が衰えていく神経の病気）を患っている方をお招きし、お話を伺ったのです。三十代の働き盛りにＡＬＳを発症して車椅子生活になりながら、選挙をはじめ、障がい者の権利の保障を訴え続けている方です。郵送で投票できる制度を実現させたなどの岡部さんたちの活動に共感を覚えつつ、岡部さんの前向きな姿勢と自立した考え方にも心を打たれました。介助者がいないと人とのコミュニケーションや移動も難しい中、健常者ならば当たり前の生活を諦め、閉じこもりがちになって当然と思いがちです。しかし、介助を受ければ移動ができる、話ができると全てのことを前向きにとらえ、積極的に介助されることを選択し、外に出て自分の考えを堂々と述べる岡部さんの姿に、私は驚き、大切なことを学んだと思いました。

授業の終わりの質疑の時間では、多くの生徒から、岡部さんの共感や直接会って話を聞くことの大切さが語られました。その中で印象に残ったのは、最初は怖かったが、授業で話を聞いているうちに岡部さんという個人を感じることができ、それにより怖さが薄らいだという感想でした。この感想は、非常に大切なことを含んでおり、是非みなさんと共有しておきたいと思います。

私たちは、車椅子に乗ったり、白杖を頼りに歩いたり、手話で会話をしたりする方々を見ると、まず障がい者という目で見てしまいがちです。しかし、それでは、その方個人のごく一部しか見たことになりません。人はみな、好きなもの、嫌いなもの、大切なもの、守りたいものなど、それぞれ持っています。性格も様々です。そのような多様な人間像を少しでも知ることができれば、先ほどの感想のように怖いという気持ちも減り、その人を尊重する、大切にするという思いも生まれてくるでしょう。

そして、そのような思いを持つ個人で構成された社会は、多様性が受け入れられ、障がいをお持ちの方だけでなく、誰にとっても過ごしやすい共生社会になるはずです。竹早中学校で、皆さん一人ひとりが、そのような共生社会を作り上げていくための一歩を踏み出すことができれば、素晴らしいと思います。